

## すべてのわざには時がある

在日韓国・朝鮮人が疎<sup>まば</sup>らにしか居住していなかった九州の熊本市内で生まれ育った私は、キリスト教徒とは無縁な青春時代を送った。出生の地が、熊本バンド結成の場所として有名な花岡山に隣接する小高い丘のような山の麓であったにもかかわらず、キリスト教の薫りとはまったく没交渉だったのである。

熊本には1871年、熊本洋学校が設立され、招かれたアメリカ人教師L・L・ジェーンズの薫陶のもと、1875年(明治9年)、徳富蘇峰や海老名弾正、浮田和民ら錚々<sup>やう</sup>の青年たちが、花岡山で集会を行い、賛美歌を謳<sup>うた</sup>って黙禱<sup>もくたう</sup>、聖書朗読の後、「奉教趣意書」に誓約した。後に言う、熊本バンドの結成であった。

ただ、後の時代に骨の髄からの帝国主義者に変貌する徳富蘇峰に見られるように、熊本には軍都として栄え、尚武を重んじる保守的な気質が根強く、わたしの周りには、そうしたエリートスが空気のように充満していた。特に、戦時中、九州精銳部隊を擁し、軍需工場もあった軍都・熊本の駅周辺には、朝鮮半島の出身者が住みつき、戦時動員の底辺を支える労働力を担っていた。彼らの多くが、朝鮮半島の南側の貧しい農村の出身者であり、わたしの父もその中のありふれた小作農の長男であった。母は、隣村の父に見初められ、太平洋戦争勃発の年に、その父を頼って単身、日本にやって来たのである。母、16歳の時だった。

そうした父や母、そして同じ様な境遇の在日韓国・朝鮮人が、戦後、行き場を失って肩を寄せ合うように住み着いた集落には、熊本バンド結成の地と目と鼻の先にあるにもかかわらず、イエス・キリストの光が差すことはなかった。あるのは、自分たちの生まれ育った故郷の、因習にも近い土俗的な祖先崇拜と靈魂信仰だった。とりわけ信心深かった母は、そうした土俗的な儀礼と祭祀の、ほとんど神経症的とも言える忠実な

実践者であった。

30代の半ば過ぎ、わたしが洗礼を受ける決断をした背景には、無意識のうちにわたしの中に堆積されて来た、母の影響があったように思えてならない。人知を超えた何ものかに對する恐れと尊崇、信心深さは、母が我が家に持ち込んだ儀礼と祭祀が繰り返される中で、わたしの中にも育まれていったのである。

もっとも、洗礼を受け入れるキッカケは、別にあつた。

80年代の半ば過ぎ、バブル経済華やかに日本は、アメリカを凌ぐほどの好景気に湧き、他方で、わたしは「人差し指の自由」(外人登録法に基づく指紋捺捺義務)すらままならないまま、埼玉県で指紋捺捺拒否の第1号になり、不安な日々を送っていた。ささやかながら、家族をもち、定職を求めて苦闘していた頃、わたしは捺捺拒否を貫けば、逮捕、収監される瀬戸際に立たされていたのである。そんな苦境にある中、父が、そして事実上の叔父と言える人が、立て続けに不帰の人となってしまう。わたしは深い悲しみとともに、進退窮まり、同時に自分の心の中に怨嗟の炎が燃え盛ろうとしていることに気づいた。

だが、そのことに気づいていたのは、私だけではなかった。指紋捺捺拒否でわたしを支え、親身になって相談に乗ってくださった、上尾合同教会の土門一雄先生が、わたしのことを気遣い、そして受洗を勧めてくださったのである。土門先生の勧めに、わたしは当初、困惑し、たじろいだ。しかし、「姜さんすべてのわざには時がある」(「伝道の書」第3章第1節)「んですよ」という土門先生の言葉は、わたしの心を射抜いたのである。わたしの心は打ち砕かれ、心の重荷が除かれていくような気持ちになったのである。

土門先生が受洗の記念に下さった、日本聖書協会発行(1986年)の、黒の革張りの聖書の扉には、土門先生愛用のウオーターマンの万年筆で「信仰と希望と愛と」(「コリント人への第二の手紙」)が書き記されている。

それから四半世紀、土門先生も、無二の「心友」も、恩師の藤原保信先生も、母も、さらに息子も今はいない。そして、わたしは2014年4月から、上尾の地にある聖学院大学で学長として勤めを果たすことになった。まことに、「すべてのわざには時がある」のだ。